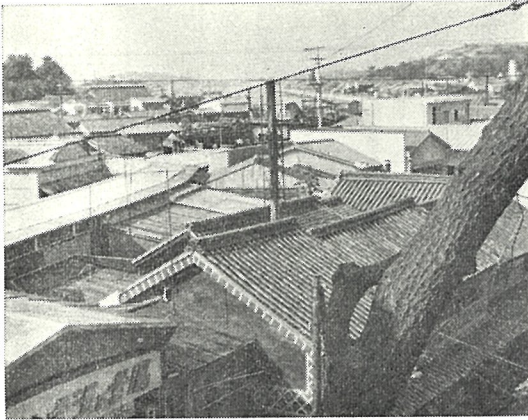


同志社

歴史散歩

玉島

鏑木路易



羽黒神社より玉島港を眺む

はじめに

私は、これまで、いくたび玉島を訪れたであろうか。私は、山陽本線を利用するおりがあれば、いつも、尾道と玉島に途中下車をする。尾道に降りるのは、ここが、私の趣味とする古建築の宝庫の地だからである。玉島に降りるのは、その水門と細長い入江をなす河港とそこに舞めく小船のある町の風物が、私のたまらぬ感傷をそそるからである。それに、この玉島は、新島裏―正しくは七五三太―の思い出深き処女航海の地でもあるからである。

それで、新島裏ゆかりの跡から、歴史散歩を試みてみよう。

庄屋・柚木正兵衛の屋敷跡

玉島港の湾奥の両岸には倉庫が並んでいる。東岸一帯は矢出町と呼ばれるが、この倉庫群の裏手に日展審査員・画家・柚木久太（願庵）の瀟洒な住居がある。柚木家は、代々、備中・松山（今の高梁）藩領玉島の庄屋を勤めた家すじである。その屋敷は、現在の住居の向側にあつて、某会社の社宅に貸して

ある。

*君公御成の間や、鳥羽伏見の戦い直後、自刃により玉島を戦火から救つた有名な藩老・熊田恰の切腹の間は、使用されず、そのまま保存されている。

嘉永四年、庄屋・柚木弥策没後、嗣子幼少のため、庄屋役は分家の手に移り、柚木正兵衛とその長子とが廢藩まで、その役を勤めた。

新島日記・玉島兵庫紀行の中に、

『正午之潮ニ順ひ端舟及漁船二而牽き玉島港ニ入レリ此夜上陸致し名主柚木庄兵衛と申者の宅え行き入湯致し早速船へ帰レリ』（文久二年十二月三日）

とある柚木庄兵衛は、この正兵衛である。この分家の屋敷も、すぐ近くにあるが、現在は露路で結ばれた小さな家々に分割され、新島裏来訪当時の面影は見られない。

*その後、正兵衛の一子が本家を継いだ。それが、南画家・柚木梶雄（正郷）であり、その長子が、柚木久太である。

快風丸

新島裏が玉島に来たのは、松山藩が購入した洋式船・快風丸が、江戸から玉島へ初の航海を行なうに際し、松山藩・川田剛のとりなしにより、それにうまく便乗したからであつ

て、そのことは、どの本にも書いてある。しかし快風丸がどのような船であったか、というふうになると、同志社関係の文献では、根岸著とそれから引用した誤りと思われるもの二三をのぞいてはどれも載せられていない謎となっている。それで、この機会に、『山田方谷全集』から抜書すると、それは、

二本橋―スクウーネル

長十八間 幅四間半位

三百五十トン積

の船であった。在江戸の藩士・川田剛らの努力によつて、文久二年、横浜で購入した貿易兼国防用の洋式船で、江戸湾にて練習を重ねた後、塩田虎尾外二名の藩士と安中藩士・新島襄とによつて玉島へ回航したのである。

*山田方谷は、松山藩の大儒として有名であった。山田方谷全集の各所に、快風丸関係の記事が散見される。しかし、そこら、まとまった結論を出すことはむづかしい状況である。たとえば、それらの記事がすべて正しいとすれば、快風丸は、和蘭商人の手を通じて購入した、英国製であるが、船籍は米國船である、という変な船になる。だから、もつと資料の吟味が必要である。

川田剛と当時の玉島

新島襄は、一時、川田剛の門下として漢学

を習ったことがある。川田剛は、明治に入つて、その令名つとに高かつた漢学者であり、歌人・川田順はその庶子になる。しかしその伝記を調べると、単なる漢学者ではなく、むしろ、任侠肌の人である。それだけ、新島襄が、その数々の書簡からもわかるように、たいへん頼りとしていたのもうなづけることである。この川田剛の生家は、現在も、玉島郵便局の近くに残っている。^{*}

*校友名簿によると、局長は同志社初期の卒業生の一人であるが……。

玉島は、当時、瀬戸内有数の股賑をきわめた港であつたから、文人墨客の来遊が多く、向学の地でもあつた。だから、川田剛のごとき人物があらわれたのも不思議ではない。それとともに、勤王の志士の往還がげしかつたことも、『玉島市史』から知られる。それで、加藤延雄著『新島襄先生略伝』の中に、『生れて始めて江戸や安中以外の地方を見学し、又関西の勤皇の志士とも交つた。』(玉島処女航海の記事中より)

とあるのも、玉島に関しては、当然ともいえることであつた。^{*}

*新島襄は、その日記より、十二月中旬のなん日かを玉島ですごしたと推察できるから。

その後の玉島と同志社

時代はとんで、明治四十年前後に移る。熱心な金光教の信者であり、当時、京都・西陣・千本座―現在スーパーマーケット―を経営していた牧野省三が、たまたま、金光参りの途次、ほど遠からぬこの玉島の一芝居小屋―甕江館^{*}といつて、現在は映画館―にたち寄り、そこで見出したのが、その後、一世を風靡した目玉の松チャン・尾上松之助である。やがて、牧野省三は、映画界に入るとともに、彼も横田商会に入社せしめ、この松之助映画を監督(当時は狂言)して名を成したのである。同志社は、映画界にも多くの人物を送っているが、牧野一家とも関係が深い。そうした意味で、このエピソードも、歴史散歩として記すことを許されるであらう。

*甕江の名称は、玉島の歴史には欠くことのできない地名である。川田剛も甕江と号していた。しかし、ここでは、くわしいことは触れないでおこう。

さらに、年月は経過し、大正七年となる。この年の八月、同志社の生んだ文豪の一人・徳富蘆花が、門弟に招かれて、妻女を伴つてこの地を訪れている。町の西部の山腹にある円通寺―良寛和尚の修業の寺で、その遺品が

多い。県指定の名勝・史跡・重要美術品となつてゐるには、駕籠で、石段道を登つて尋ねたそつである。また、町の東南にあたる海岸で、遠浅であるので、潮干狩で名を知られた養父が鼻を尋ねた時は、歌を残している。ここに、蘆花の比翼塚があつて、蘆花の方の石は、この歌が刻まれ、歌碑ともなつてゐる。その歌は、

人の子の貝掘りあらず砂原を

平になして海の寄せ来る 健

というものである。しかし、この周辺も、今は工場もならび、すっかり情景が変わつた。

むすび

瀬戸内は、戦後、急速に変貌しつつある。港町玉島も、工都玉島と變つていきつつある。しかし、私の感傷をそそる風物のつづくかざり、新島裏ゆかりの地であるかざり、こうした歴史の跡ののこるかざり、これからも、いくたびか、私は玉島を訪ねることであらう。

(香里 高校教諭・社会)

訂正 第11号掲載の同志社歴史散歩「大阪2」の記事の中に「大阪ステーション」とあるのは「梅田ステーション」の誤りでした。お詫びして訂正します。

秋季憲法講座

10月6日	日本国憲法施行十九年	関学大教授 黒田一円 一億
10月13日	佐々木惣一博士と日本国憲法	同大教授 田崎辰五郎
	佐々木博士の憲法学	甲南大教授 磯崎辰五郎
	佐々木博士の行政法学	大阪府大教授 盛秀雄
	佐々木博士の風格	東大教授 小林直樹
10月20日	日本国民の憲法意識	佐賀大教授 上野裕久
10月27日	日韓交渉と日本国憲法	同大講師 金丸輝雄
11月3日	ベトナム戦争と日本国憲法	弁護士 東中光雄
11月10日	国際連合憲章と日本国憲法	神戸外大教授 川口芝確三
11月17日	教育と日本国憲法	立命大教授 前田治三郎
	近江兄弟社学園中・高校長	法学修士 谷本治三郎
11月24日	福祉国家と日本国憲法	京大教授 田畑茂二郎
12月1日	最低賃金制と日本国憲法	同大講師 土井多賀子
12月8日	政党と日本国憲法	同大講師 宮本栄三
	日本社会党委員長 佐々木更三	同大講師 松下泰雄
	大阪市大教授 吉富重夫	同大講師 岡田良夫
		同大講師 上田勝美
		立命大教授 浅井清信
		同大講師 浅井清信
		同大講師 浅井清信

所 同志社大学 弘風館 地下一番教室
時 10月6日より 毎週水曜日 午後4時より

主催 憲法研究所 同大法学部研究室内